

— ナス科野菜の青枯れ病対策 —

<< 予防 >>

対 策	目 的 及 び 方 法
<p style="color: red;">土壤熱消毒 (7-8月の太陽光熱を利用する)</p>	<p><方法> (1) <u>深さ 30cm 以上耕転する</u></p> <p>(2) <u>苦土石灰等で pH6.0~6.5 にする</u></p> <p>(3) <u>有機物、元肥、廃菌床(キノコ栽培後の床)を深さ 30cm くらいまでムラなく漉き込み、畝を立てる</u> この時、適度に水を撒いて漉き込むとやり易い。</p> <p><ポイント> 消毒後に畝を立てると、消毒できていない下層土と混ざって消毒効果が下がる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・有機物：バーク堆肥、米糠、燐炭、腐葉土、廃菌床等 ・元 肥：有機配合肥料又はボカシ肥、骨粉入り油粕、牛糞堆肥、 ・廃菌床＝地温を上げる効果がある <p>(4) <u>畝の隅々まで灌水する（水分率 60%）</u></p> <p>(5) <u>透明ビニルマルチで被覆する</u> この時、四方を土で覆い、ビニル被膜内の熱が逃げないようにする ビニルマルチを二重にするか、厚めの農業用ビニルを用いるとより地温が上がる。</p> <p>(6) <u>約 30 日後にビニルを取り除く。</u> ※開始後、2-3 に一回程度、昼間の地温を棒温度計で測定する。 測定場所：深さ 20 と 30cm、畝の中央と端。 深さ 30cm の所が 40℃以上になっていれば成功、40℃以上が 10 日以上あれば大成功</p> <p>(注意) この方法で消毒できるのは深さ約 30cm。 青枯れ病菌の菌密度が高いのは深さ 40cm までだが、深さ 1m 位まで検出されている。 この方法である程度菌密度が高い部分は消毒できるが、青枯れ菌を完全に消毒することはできない。</p>
<p style="color: red;">ナス等を植える前に 石灰を施用しない</p>	<p>青枯れ病が発生した市民農園でナス科野菜を栽培する際には石灰を施用しない。 青枯れ病菌は土中にある細菌の一種。 土壌中の細菌の活動は弱アルカリ性で最も良くなる。</p>

連作をしない	同じ場所にナス科を植えない。
窒素肥料をやり過ぎない	窒素肥料を控えめに施肥する⇒やり過ぎると青枯れ病が発生し易くなる
堆肥を多めに施用する	土壌中の微生物の種類や量を増やし、病原菌だけが増殖するのを抑える。 堆肥の種類は特に限定しない。牛糞、豚糞、バーク、腐葉土等。(鶏糞は除く)
好気性微生物を増やす	病原菌となる微生物密度を下げる。 いい微生物のエサとなる、堆肥、米糠、燻炭、腐葉土、骨粉入り油粕等を深さ 30cm 以上良く漉き込む または、「菌力アップ」(商品名)の希釈液で灌水する。
排水をよくし、高畝にする	土壌水分過多の状態が長く続くと、根痛みして傷口から病原菌が入りやすくなる。
抵抗性の品種の使用	青枯れ病に強い品種や抵抗性台木に接ぎ木した苗を使う
畝をマルチングする	青枯れ病菌は地温が 25-35℃で活発になる。 ビニルマルチや敷き藁で地温を下げる。
マリーゴールドを畝の肩部に植える	マリーゴールドはネコブセンチュウ密度を下げる物質を出します。
引き抜いたマリーゴールドを細かく (2-3cm)切り土に漉き込む	① ネコブセンチュウを減少させる。 ② ネコブセンチュウによる根の傷が減る ③ 傷が減ることによって青枯れ病菌が入り難くなる
コンパニオンプランツの利用	ニンニク、ネギ、ニラ等のネギ科植物の根に共生する拮抗菌が青枯れ菌を抑える。
ハサミやナイフ等を消毒する	ハサミ等に菌が付いて他株に病気を伝染させないように。 消毒液：レンテミン、ビストロン 10

<< 発病したら >>

早急に発生株、地中の太い根、周辺の土すべて袋に入れて廃棄する！

水遣りを控える！⇒最近の伝搬を抑える（細菌は水で容易に伝搬する） ※萎れてきたと思い水を遣るのは逆効果

発病した畝で使った道具や支柱は、使用後消毒するか水でよく洗い天日でよく乾かす。靴底もよく洗う。

注) 水、肥料、石灰は必要最小限にして、やり過ぎないようにしてください。